



中村幸彦編

近世庶民文学論考

中村幸彦著

中央公論社

昭和四十八年六月二十日 印刷  
昭和四十八年七月五日 発行

定価三〇〇〇円

書名 近世庶民文学論考

著者 尾崎 久 彌

発行者 山 越 豊

印刷 図書印刷株式会社

製本 大日製本株式会社

製作 ブック・ビジネス

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二一

電話(五六一)九六二一

振替 東京三四

検印廃止

©一九七三

郷土本概説

郷土本方言素の再検討

方言小説家 石橋庵真酔

一九・三馬の研究

種彦・春水の研究

天保改革と春水

怪談物の源流

“西鶴”縦横

西鶴の探偵小説味

西鶴好色物のモデル

西鶴に拠るおさんの正体

衆道談義

五

四

六

七

一〇

一三

一六

一四

一五

一五

一五

一七

原始的な稚児物	一七九
埒外衆道物の一本	一九三
馬琴初期の芝居好	二〇一
江戸小説の役者物―付『極楽道中記』	二二七
地狂言の系脈	二四四
地方色の描写―『田舎芝居』の亜流と鄙遊里本	二五〇
洒落本改題本の新記録	二七三
『娼妓絹籠』と『仕懸文庫』の正版と偽版	二六七
洒落本雑記	三〇〇
最古の「どぶ」	三三三
あとがき	三八
筆歴六十年	三三
解説	三六
中村幸彦	

近世庶民文学論考



## 郷土本概説

## 一 「郷土本」の定義

「郷土本」とは、従来の如何なる成書にも無い名目である。これは、私が単り、江戸時代小説の或る特殊な一類に、自ら附けた名であるからである。

田舎人自身が田舎を描ける作品、言い換えたなら、郷土作者が自分の郷土を自ら描いた、郷土色即ち地方色の濃厚な作品、それに対して特に「郷土本」と名づけるのである。此の命名は、嘗て誰人も思いついてはいない。従来此のいわゆる「郷土本」の作家とその作品の分類は、時によって「滑稽本」の中に入れられたり、又は全く除外視せられ遺却せられて来た。滑稽本の中に採り入れて、その一部としていたのは、まだましであつたのである。私の此の「郷土」の概念は、三都——京・江戸・大坂以外をすべて郷土として取扱うのである。名古屋とか金沢とかの大城下町もあるにはあるが、一括して郷土として取扱う。唯、江戸が文化の中心となつた時代、それは大体に於いて享保年間（一七一六—三五）の事であるが、それ以後といえども、京と大坂とは、江戸に准ずるものとして、郷土以外、三都のうちとして取扱うのである。

郷土を郷土人自らが描く。つまり一種の郷土自慢、田舎案内である。作家は、郷土人である、つまり田舎作家

である。江戸の中央文壇の如き比ではない。その亜流、その追隨摸倣が多い。従つてその作品が、文学としての作品的価値は、低い。既成作家、文人作家の主に江戸に住む彼等に、劣るかも知れないが、別個の意味で、現代、却つて大いに価値づけられようというものである。別個の意味では、文学的作品価値の意味ではない。文学自体としては、第二義に墮するかも知れないが、当時の事実を或る程度正直に伝えた地誌、案内記、さては風俗誌、又はその作品に使用せられた言語からして、当時其の地方の方言録、方言採集本として、簡単にいえば、当時の地誌又は風俗誌・方言誌として却つて価値があるうというもので、つまり文学作品として以外、学問的価値があるうというものである。

さて、その「郷土本」には、内容上、大体に於いて二様がある。一は、従来の滑稽本の系統を引くもので、その作家附近の神社仏閣、その参詣記事を主題又は副題としたものである。つまり社寺詣。二は、その作家の住む町、村又はその附近の町村に私設せられた風俗地帯又はこれに准ずるもの、——例えば温泉宿の湯女の如き——を主題又は副題としたもので、これ等は泰平の逸民の多かつた当時、郷土本にも相当の数に上っている。謂う迄もなくこれは洒落本の系統を引いたものである。中には、此の社寺詣と風俗ものと両方兼ねたものもある。又はどちらかが稀薄で、即ちちょっと配材に採り入れたという程度のももある。

さて此の二様、これ等が江戸文壇から如何に影響を受けたか、追隨して生れたものであるかを、更に詳しく述べてみよう。

社寺詣の形式のものにあつては、十返舎一九の『膝栗毛』、及びその類似作に最も影響を受け、殆んどそれから生れたものというていい。此の意味で、一九の『膝栗毛』ほど、摸倣作を生んだものは、全く他に無い。如何なる一九と同格、又は以上と思われる、古く西鶴の如き作家にも、見当らない。彼等の名作も、相当に摸倣作又は

後代に影響を与えておる。けれども一九の此の『膝栗毛』及びその類似作ほど、幅ひろく即ち全国到る処に摸倣作、又堅に長く即ち時間的に数十年に亘って、摸倣作を生んだ、かかる事は、まず江戸時代文学では、一九だけの実績である。それ程に此の『膝栗毛』及び其の類似作、就中『膝栗毛』が、大衆的であつた訳である。無論此の「大衆的」という私の意味は、郷土本を産むための田舎人一般に對しての意味である。

従つて此の郷土本發達史上、一九の『膝栗毛』よりというが、それを年代的にいうと、享和二年以後である。という訳は、一九には『膝栗毛』やその類似作（一九自身の）は、相當に数多いが、中にも『膝栗毛』は、『東海道中膝栗毛』以来、諸道中膝栗毛、つまり連作の形である。けれどもその最初は、『東海道中膝栗毛』初編の出した享和二年、それから一躍、文壇の主流となり、都鄙に、格別「鄙」（田舎、即ち三都以外の郷土）に喧伝せられるに至つたのであるから、従つて『膝栗毛』物の最初は、此の享和二年であり、しかるが故にそれから延いて生れた郷土本のうちの一体、社寺詣の形式の發祥は、則ち享和二年以後と見做さねばならない。享和二年は一八〇二年、ちょうど年表を見ると、

二月二十三日、羽太正養・戸川安倫を蝦夷奉行とす。○五月十一日、蝦夷奉行を函館奉行と改稱す。○七月一日、諸國洪水江戸最も甚し。○同二十四日、永く松前氏の東蝦夷地を收め年金を給す。○十月十九日、老中安藤信成轉じ、土井利厚代る。

といった時代で、北辺漸く穏やかでないものがあつた頃である。近藤重藏等のエトロフ島巡察の復命も此の年の冬、又伊能忠敬をして幕府が奥羽越後を測量せしめたのも此の年の事という。しかるに泰平なりし余沢か、鎖国の情勢か、とにかく其の頃に於いて、始めて「弥次郎兵衛」「北八」が生れ、やがては又それが私の謂う郷土本よき半身——社寺詣を生むに至つたのである。

今一つ、風俗地帯ものの郷土本は、これは明らかに洒落本から来ておる。洒落本に多い風俗地帯ものは、天明寛政頃に最も多く、又それらの名作と称するものも、其の頃に出た。それが鄙にも行われ、読まれた。遂に、その摸倣作を生むに至った。即ち江戸版の江戸の一流さては二流三流の輩——洒落本作家が描いた江戸の処にかわつて、郷土の彼等の知る処を描くのである。それは、お手の物である。但し筋（一作のうちの物語の運び、推移）に於いては江戸版のそれを窺（うかが）んだり、それにちよつと手を加えたというものが多い。けれども稀には、筋も面白く会話も練達、既成作家も顔負けするような、少くとも刊本既成作家のそれ等にも劣らないようなものもある。

元来、洒落本にも、田舎系のものはある、即ち山手馬鹿人（不詳。或はいう蜀山人の変名）の作『道中粹語録』（一名『変通軽井茶話』）の如きは、刊本洒落本としては珍しい田舎風俗地帯本である。田舎の芝居を採り入れた万象亭（森島中良、二世風来山人、森羅万象、竹杖為軽（かろ）に同じ）の作の『田舎芝居』は芝居ではあるが、一種の田舎本、つまり郷土本の卵といつてよい。田舎者を江戸の真中へ引張り出して、田舎者を弄んで喜ぶ江戸人の皮肉さの漂っている作者不詳の『真似山気登里』も、文学に田舎（郷土）を注ぎ込んだ、然る傾向の最初の方で、これもレッキとした洒落本の一冊である。

しかし彼等、洒落本に於ける郷土色——地方色は、ちよつと風変りといつただけの興味を呼んだだけで、洒落本作風の主色とはならなかった。やはり江戸の地内が全盛である、都会色の打出しが全盛であった。けれども此の僅かなる田舎——郷土の息吹がやがて田舎へ渡つて、郷土洒落本を生む前提となり、遂には此の種の変わり種を生むに至った。これが引続いて流行し出した享和二年以後の十返舎一九の『膝栗毛』から来る、いわゆる郷土本の社寺詣、つまり『膝栗毛』の追随作、摸倣作、改作などと相錯綜して、以て郷土本の特色いよいよ鮮やかなるものを生む。しかしその題材の、社寺詣とは事変り、風俗地帯ものである、此の点、系統としては、洒落本から

きているのである。現に郷土本のこれまた半身——風俗地帯本には、一九の『東海道中膝栗毛』初編の享和二年より古きものも見受けるからである。

## 二 郷土本作家の群

次に、作家群の話である。

まず、社寺詣ものも風俗ものも、一括して郷土作家の郷土本として、さてその郷土作家なるものは、その作的態度に於いて、江戸在住の既成作家が、偶に作中に「郷土」(田舎)を書く者あるのよりは、全く異なる事である。

即ち江戸の既成作家は、都会又は都会人の偶々に見る変ったお相手として郷土を見るのである。つまり都会本位の描写であって、その対照として田舎(郷土)を描いた。田舎を都会(江戸)に比較して、その未開、魯鈍、緩漫、失態を嗤うにあつた。田舎又は田舎者をダ、シ、に使用して、都会(江戸)のえらさ、都会人(江戸ッ子)が代表の聡明、敏捷を吹聴するにあつたのである。——かかる傾向のもの、滑稽本の種類、「はなしばん嘶本」にザラに出て来る「馬鹿掣話」(田舎を非文化であるとしての代表的笑話)とも相通するものがある。

そこへ来ると、郷土本作家即ち郷土人は、ちがう。彼等は、自己の住む世界(田舎、郷土)を描く、従つて田舎自慢、土地自慢である。己れ達の住む土地に愛着を持つ。それは誰しもの人情であるが、それが郷土本にも滲み出ている。既成作家の江戸在住の作家が、江戸を吹聴するのに並行して、寧ろ負けじとその郷土(田舎)を描くにあつたのである。

一九の『膝栗毛』は、従来の江戸人作者の作風とは反対に、都会者(弥次郎兵衛と北八の兩人で代表させた)が、田舎へ飛び込んで、勝手知らぬ為の失敗、それを描いて自然と滑稽を感じさせるので、中には無理に笑わせよう

としたのもあるが、即ち作為の甚しいのもあるが、要するに作家自ら意識してかかっていたの都會者（弥次と北）の酷使、虐待である。江戸ッ子はこれを読んで、自分達の仲間が、ひどい目に逢わされているのを見て苦笑いを禁じえなかっただろうが、田舎の読者はこれを読んで痛快を感じた、喝采した。これあるが故に、一九の『膝栗毛』は、あれ程全国の津々浦々に行き回ったのである。版を変え絵を違えて、幾度も刷り出されたのである。

さてこうした意味に於ける郷土本の作家群といえは、簡単にいえば、全部が素人である、田舎作家である。素人にも程度問題で、ウブの素人ではない。けれども、江戸の既成作家（一部分は、江戸に准ずる大坂・京の作家に較べての事で、私が今「素人」と名づけた以下の素人は、郷土（田舎）にあった訳である。とにかく田舎の、文学愛好者、江戸版（稀には、京坂版）の文学作品愛読者、その愛好愛読が嵩じて、自分も書いてみようと思ひ立った。その為の執筆である。江戸の既成作家も、著作副業にして、本業は外にあったのが多いが、著作だけで飯の食え、寧ろ飯を食ったのは、第一流作家の極少数で、他は本業を別に有していたが、郷土本作家は無論それ以上に己れの僅かな手ずさび——郷土本の作くらいで飯の食えそうな筈はない。全部生業が他にあった訳である。その生業は、土農工商、とりどりである。神官僧徒の如きもある。それは、実氏名不詳であるのが、殆んどである。従つてその生業、身分に就いては、一、二の外は、私たちの推定に外ならぬ。けれども、少くとも当時の田舎に於ける知識階級、学問を弁え文字を陳ね得る者であったことは確かである。既成作家（文人）に較べて、作品的価値は低い、とにかく一作又は数作をものす、そこに多少の文字が無くは出来ない。それに江戸文壇の文人作家のものを時折読んでいなくては出来ないのである。これ当時の田舎に於ける知識階級の少数者であったことが、推定せられ、その推定が的中していることが断定せられる。

次に、彼等郷土本作家に依つて成された郷土本は、十中八、九、未刊本であることに注意しなければならぬ。

彼等の作が、未刊本であることは、当然である。出版のしてがない。金沢とか名古屋とかの大城下は、田舎といえども、相当の出版物はある。けれども、文学的作品までというのは、極稀である。ましてそれ以外は、殆んど出版の機会がない。そこで彼等郷土本作家の群は、自家の稿本（作家自身の筆蹟によって成った、自筆本）で満足せざるを得ない。江戸に住む江戸文壇に名を列ねる者でも時おりは、入銀作家の多かつた時代である。入銀とは、銀（金銭の意）を版元に入れて、即ち出版費を提供して、營業的出版元に出版してもらうのである。こうした時代であるから、出版機関にも恵まれない田舎では、たとい入銀しようとしても、相手の版元がないのである。稀には、京・大坂又は江戸の營業的出版元に依頼して、出版させた二、三の例も郷土本に見受けはするが。

とにかく稿本のままのものが多し。稀にはその稿本からの写本もある。これは、その作家の仲間、又は崇拜者又は内容に心酔した男が、好んで写本したのである。此の写本か稿本か否かは、一見して容易に知れる。即ち稿本は、塗抹の痕がある、又どこことなく達者にのんびりと書き流している。写本は、塗抹の痕なく、井然としている。極珍しい例としては、写本の複本が数本存在することもある。名古屋に明治中期まで存在した大惣（大野屋惣八）という貸本屋があった。明治中期に、在庫本の殆んどが入札せられ、いい物は東京へ売られ、当時の帝大にも蔵架せられたが（大正の震災で焼失した）その大惣の印のある郷土本の複本が、おりおり見受けられる。これは大惣に抱えつけの筆耕家があつて、今ならばさしずめ謄写版というところを、その筆耕の手に、貸本用として郷土本の新作を三、四、複本を拵えるのである。つまりこれは、版本と稿本との中間で、普及性を望んだ写本である。が、こんなのは例の少い方で、大体は作家自身の稿本で、今日に残存している。稀に、好事家の転写本があるという程度である。

本によつては、随分と念入りなものもある。それは、すっかり版本めかして作りあげたもので、普通の版本には、

末尾のところに、「板元曰」として、後編其の他の予告をしたり、その版元の既版新版類の書目を掲げているが、それを真似た稿本の郷土本がある。一見、版本らしく見せかけたものである。又時にはその郷土本の文字（作者の自筆多し）が、誠に丹念なもので、そのまま版下にして上木してもよい程、書体うるわしく、恰かも版下書き——即ち専門的な筆耕の文字そのままといいたいものもあることである。これには、私は、寂しい、しかし物書く者の真剣な気持に打たれる。

作家の身元は、殆んど不明である。一、二は、判明しているものもある。例えば、寛政末から天保頃へかけて名古屋文壇を牛耳った椒芽田楽（医師、神谷剛甫）とか石橋庵真酔（彫工、美濃屋伊兵衛）とかは、判明している。けれども他は、不詳なのが多い。

### 三 未刊郷土本のかずかず

私は、此の種郷土本（主に未刊本、即ち作家の稿本、又はその転写本）を多年に亙り、搜索蒐集している。地方の民俗、芸術、方言の類を知らんとするに、最も適当であるからである。二、三、江戸の版本内容の丸写し、人物名だけを変えたというインチキ物もあったが、大抵はうぶである。それに大体に於いて稿本であるから、即ち天下にその一冊より無い訳である。幸いにして私の手に拾われる。で無ければ、足一步、すでに反故にならんとしていた運命のものもある。現在約四十部を数えるが、まだまだある筈である。或は、過去に於いて、版本でないが故に莫迦にせられ、或は写本とも何ともつかぬものの存在の為に、その貴重性を認められず、反故となり裏貼りにされたり焼かれたりしたのも多からう。誠に惜しい限りである。今後も、続々と、或は此の反故になりつつあるかも知れないのである。

さて私の集めた未刊郷土本は、私が主に住むのが、名古屋であるというせい、それとも三都について、文芸心酔の徒が此の尾州家（御三家筆頭の）の城下町に多かつたせいといふのか、名古屋又はその附近のものが多くて、どうも偏頗である。どうしても無い地方がある。九州辺又は東国、さては金沢辺のものは、全くないというてよい。

仙 台	一	莊 内	二
武蔵神奈川附近	一	駿 遠 三	一
遠 三	一	三 河	二
伊 勢	二	信 濃	一
美 濃	一	山城伏見	一
奈 良	一	備前小串	一
備中井原	一	阿 波	一

以上は、尾張物以外の概数であり、尾張物は、二十種近くある。但し此の尾張物以外の数字、十七種というのは社寺詣でものもの他に、風俗ものも含んだ数字である。尾張物二十種近くというのは、中に名古屋物を含んだ数字である。

今、左にまず社寺詣のもの——膝栗毛系だけの、主なる書目を掲げてみよう。筆者架上よりである。書名、作者名、作者の所在地、描かれた社寺、本の形、冊数、稿成るの年代、及び既成分類による内容の暗示の順序である。

○仙臺風よ（作者名ナシ） 仙台歟

仙台城下諸社寺其他

半紙本 一冊 年代不詳 (隨筆体)

○きつひむだ枕春の目覺 (艶好) 名古屋

駿遠三地方諸社寺其他の名物

中本 一冊 寛政八年 (黄表紙体)

○百千鳥蓮師参り (二世連女狂人) 三河西尾

三河西端の応仁寺詣

中本 二冊 万延元年 (滑稽本体)

○秋葉詣道の記 (豊年舍出来秋) 名古屋敷

名古屋より秋葉詣

中本 一冊 年代不詳 (滑稽本体)

○多度の家土産 (彌生堂のあるじ) 桑名

桑名より多度参詣及び津島へ

小本 二冊 安政二年 (滑稽本体)

○四手駕 (三光亭月守) 美濃加納敷

美濃加納より関ヶ原へ (美江寺詣)

中本 一冊 文政三年 (滑稽本体)

○新膝栗毛賀羅句多断 (幡龍齋眞金) 備前小串敷

備前小串の観音巡拝